

---

# ハヤテのごとく！～愛沢 咲夜と愉快な仲間たち～

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテの「」とくーー 愛沢 咲夜と愉快な仲間たち

### 【Zコード】

Z6771C

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

ヒナギクを一方的に振ったハヤタが咲夜の執事に成つて咲夜が恋してなんと咲夜と結婚までしてしまうと言つそんな物語。さて、私は今「咲夜」を何回言つた？

## Story 01・ハヤタVS伊澄

ハヤタは病院を跡にし、三千院家の自室に戻った。

「別にナギに恨みがある訳じゃねえが、こんな所出てつてやるー。」

ハヤタそう叫びながら荷物をまとめ始めた。

「とは言つ物の、行く当てはあるのか、と

「知るか！」

ハヤタは天に向かつて睨み付けた。

大方、若本ヴォイスでも聞こえたのだらう。

「さて、こんなもんか」

ハヤタは荷物をまとめた旅行鞄を手にし、三千院家の跡にした。  
(勢いで出たが、行く当て無えんだよなあ)

はあ・・・　ハヤタは溜め息を吐いた。

「ん？」

ハヤタは塀に貼つてある一枚の貼り紙を見付けた。

それは愛沢家の執事募集広告だつた。

「こつ、これは！」

ハヤタは愛沢家に向かつて駆け出した。

「わっ！」

刹那、ハヤタは石に躓いて転んだ。

その拍子に偶々通り掛かつた咲夜の胸に、ハヤタの顔が埋まり、  
ドミノ倒しの如く倒れた。

「いたあ・・・。アホー！自分、何処見て走つてんねん！？」

「そ、その声はナギの従姉の咲夜か」

「ん？何や、自分やつたか」

咲夜がそう言つると、ハヤタが顔を咲夜の顔の前にずらした。

「咲夜、お前に頼みがある」

「・・・ウチを馴れ馴れしく呼び捨てせんで貰えんか？で、頼みつて何や？」

その問いにハヤタは真顔で「俺を雇ってくれ」と答える。

「じ、自分、ホンマに言つとんの・・・？」

と、咲夜は疑問符を浮かべる。

そんなやりとりを勘違いしたのか、必然的に通り掛かつた親子が、

「ママー、あのお兄さんが女の子を襲つてゐる！」

「シーツ、見ちゃいけません！」

と、ありがちな仕草をした。

「襲つて無えよ！」

ハヤタは子どもに妖力波を放つた、が、親が速攻でバリアを張つた。

「嘘だろ！？」

バリアに因つて跳ね返された妖力波が一人に迫る。

「ちよつ、自分、早う何とかせい！」

「おらよ！」

ハヤタは再度、妖力波を放つて相殺した。

「俺の必殺技を跳ね返すとはただ者じゃねえな」

「そう言うあなたこそ」

と、子どもの親。

両者は互いに睨み合つた。

目から黄色い線が発射され、バチバチと火花を散らす。

「どうでも良えけど自分、早う退いてくれへんか？それと、胸に手が乗つとるで」

その言葉にハヤタは目線を咲夜の胸元にやつた。

「二二二二 揉んでみるハヤタ。

「いやん・・・」

咲夜はやらしい声を上げた。

ハヤタはもう一度揉んだ。

「いやん・・・自分・・・何揉んでんねんや？」

更にもう一度。

「いやん・・・アカソつて自分・・・」

「うわ、やうじこ」  
子の親が言った。

「行きましょ」

親子は去つて行つた。

「なあ、自分？」

「ん？」

「ウチ、もう限界なんや。せやから、その、手、離してくれへん？」

「限界？」

咲夜は頷いた。

「ウチ、気持ち良くて、イッてしまいそうやわあ」  
(ヤバ、手が止まんねえ)

「自分、ええ加減に、せい・・・」

咲夜は力を振り絞つて、ハリセンでハヤタを叩いた。  
バシン！　　ハリセンがハヤタの側頭部を直撃した。

「痛！」

ハヤタは手を止めて側頭部を押された。

「いきなり何すつ・・・否、止めてくれてありがとな

「アホー！そないな問題やないでえ！」

バシン！　　咲夜はハリセンでハヤタの頭を叩き付けた。

「痛！」

と、前傾姿勢で頭を抱えるハヤタ。

「自分、何でこないな事したんや？」

「何と無く」

はあ・・・　　咲夜は溜め息を吐いて肩を落とした。

「何と無くつて何やねん！？」

「手が勝手に動いたんだ」

「そないな事あるかボケエ！」

咲夜は再びハリセンで叩いた。

「痛えな、何で叩く？」

「ウチは別に叩いておらんで。突っ込んだだけや。で、執事募集の

話しなんやけどな、ビヤ? 茶でも一杯飲みながらひらひらんで

「あ、忘れてた」

「忘れてたんか!? まあ良えわ。ほな、そこの店入るで?」

咲夜はそう言つて反対側の歩道横にある喫茶店を指差した。

「何やつてんねん? 早うせい」

と、先に渡り始めた咲夜が途中で振り返つて手招きをすした。

ブーンと鳴り響くクラクション。

咲夜は振り向いた。

猛スピードで迫る大型トレー<sup>ル</sup>ラー。

「危ない!」

と、ハヤタが慌てて飛び出し、咲夜を捕まえてトランクの前を横切つた。

キー! 急ブレーキを掛けたトランクがタイヤの痕を路上にクッキリ残して止まつた。

「いきなり飛び出して危ねえだろ!」

と、サングラスを掛けた禿げの運転手が窓を開けて顔を出して叫ぶ。

ハヤタは運転手を睨んだ。

「な、何だ?」

「・・・りろ・・・」

ハヤタは呟いた。

「はあ?」

「降りろつて言つてんだよハゲ!」

「何だてめえ!?」

と、ハゲはトレーラーから降りてハヤタに歩み寄つて頭にゲンコツをお見舞いした。

「俺が一番氣にしている事言いやがつて!」

そう言つてもう一発殴り掛かるハゲ頭。

ハヤタは素早く避け、足払いを掛けて倒し、ハゲ頭の胸倉を掴んだ。

「てめえ、自分が何したか解ってんのか！？人一人撥ねつ所だつたんだぞ！」

「つつ立つてんのが悪い」

「ブン！　ハヤタはハゲ頭の顔面を殴り付けた。

「おいハゲ、道路交通法つての知つてるか？」

「知らねえな」

ハヤタはもう一発殴つた。

「人を撥ねたら違反で罰金だ。が、それは単なる事故の場合。貴様のは明らかに殺意があつたからな。傷害か殺人の罪に問われてただろうな」

「だから何だ？　今時人一人殺したつて死刑には成んねえんだよ」

ハヤタはまた殴つた。

「そうか、そんなに殺されてえか。なら殺してやるよ」

ハヤタはそう言つて、右手を竜の手に変化させた。

「この手は人間の物じゃねえからな。俺が殺つたと言つ証拠は一切残らねえ」

「バカか？　そいつが見てるぞ」

ハヤタは傍観者である咲夜をチラシと見た。

「う、ウチはなあん何も見とらん」

咲夜はそう言つて横を向いた。

「と言う訳で目撃証言も無しだ」

ハゲ頭は恐怖で震えて鳥肌が立つてしまつた。

「お、俺が悪かつた！　謝る！　だから許してくれ！」

ハヤタは竜の爪をハゲ頭の首に当てがつた。

その時、何処からともなく、お札が飛来して竜の手に貼り付いた。

「八葉六式、撃破滅却」

刹那、ハヤタの竜の手が爆発と共に粉々に破碎された。

「うわあああ！」

ハヤタは激痛に襲われ、手首を押さえて悲鳴を上げた。

「だつ、誰だ・・・！？」

ハヤタはお札が飛んで来た方に激痛で引き攣る顔を向けた。その先には、和服姿の少女がいた。

「きつ、貴様は八葉六式使い、鷺ノ宮さぎのみや伊澄！」

「何や、二人とも知り合いなんか？」

「俺の邪魔をする気か？」

「どんな理由があろうとも殺させはしないわ。妖怪さん、覚悟して下さい」

伊澄はそう言つてお札を投げた。

「八葉六式」

「ちょい待てえ！」

ハヤタはハゲ頭を盾にした。

「爆破滅却」

刹那、ハゲ頭に貼り付いたお札が爆発し、ハゲ頭は爆裂霧散した。

「あらまあ、人を殺してしまいましたわ。どうしましょう？」

伊澄はオロオロし始めた。

「知るか！ つうか俺は妖怪じゃねえつ、歴とした人間だ！」

その発言を伊澄は、しゃんとして構え、真顔で否定した。

「いいえ、あなたは人の皮を被つた妖怪です」

その直後、伊澄は咲夜に顔を向けた。

「咲夜、その人から離れて」

「何でや？」

と、疑問符を浮かべる咲夜。

「その人は妖怪だから」

「伊澄、ハヤタはんを倒す・言づんか？」

「ええ

「せやつたらウチがハヤタはんを守る！ ハヤタはんが轢かれそうやつたウチを助けてくれはつた様に、ウチが助けるんや！」

咲夜はそう言つてハヤタの前に出、手を大きく横に広げて仁王立ちした。

「退いて咲夜。それではお札が投げられない」「嫌や！伊澄がハヤタはんを殺るつちうなら、ウチを倒してからにせい！」

「咲夜・・・。妖怪に操られてしまっているのね。でも大丈夫、直ぐに助けてあげるわ」

「何言うてんねん！？ウチは操られてなんかおらんで！これはウチの意思や！」

「操られている者は皆そういうのよ」

伊澄はそう言つてお札を投げて咲夜に貼り付けた。

「八葉六式、撃破滅却一兆分の一」

その詠唱と共に咲夜に貼られたお札が小爆発。

「わあっ！」

咲夜は悲鳴を上げて気絶した。

「咲夜！」

と、ハヤタは倒れる咲夜を支えた。

「しつかりしろ咲夜！」

しかし、咲夜は無反応。

「咲夜・・・」

ハヤタ咲夜を抱き抱え、「仇は取る」と言つて降ろし、仰向けに寝かせた。

「うおおおお！」

ハヤタは雄叫びを上げて竜の手を再生させ、目にも留まらぬ速度で伊澄に迫り、竜の手で伊澄の体を突いて魂だけを吹っ飛ばした。

「この手は靈体だから現世の物には触れる事は出来んが、靈体には攻撃が出来る・・・。この手で貴様の魂を消滅させてやるー！」

ハヤタはそう言つて伊澄の靈体に襲い掛かった。

伊澄の靈体は咄嗟にお札を投げた。

「八葉六式、撃破滅却」

「ドーン！」 お札はハヤタの眼前で大爆発を起こした。

「うわああああ！」

ハヤタは爆風で吹つ飛び、地面に落下して数回転がつた。

（つ、強すぎる・・・。勝てるのかつ、俺に！？）

ハヤタは咲夜を見た。

（そうだつ、勝たなきゃいけないんだ！例えこの身が滅ぼうとも、体張つて俺を守つた咲夜を、咲夜の仇は必ず取る！）

ハヤタは蹠めきつつ立ち上がり、妖刀・かまいたち（真剣モード）を召喚して掲んだ。

「あら、その刀はかまいたち。靈体ならどんな者でも斬れると云う。・・。あなたが持つていたのね」

「その口振りじゃ知つてゐる様だな」

「知つてますわ。それを封印したのは、この私ですから。でもそれは、自宅の蔵にしまつておいた筈・・・。一体どう言つルートで？」

「知らねえな、気が付いたら俺が持つてた」

「まあ、良いでしよう。その刀、あなたを倒して取り返します「

「させるか！」

ハヤタは伊澄に駆け、水平斬りを放つた。

伊澄はお札を投げ、

「八葉六式、撃破滅却」と、大爆発させる。

「うわあああ！」

ハヤタは再び飛ばされた。

（クソツ、やつぱアレしか無えか！）

「行くぜ！」

ハヤタは体制を立て直し、かまいたちを正面に突き出した。

「兀・・・解！」

刹那、かまいたちが紫色のオーラに包まれ、禍殿鎌鼬ままがとののかまいたちに変化した。

「それは、一体何でしよう・・・？」

「ほお、封印した本人ですら解らんか。こいつは禍殿鎌鼬と云つてな、かまいたちの真の姿だ」

そうハヤタが説明していると、伊澄がお札を投げ飛ばして來た。

「八葉六式、撃破滅却」

刹那、お札がハヤタの眼前で大爆発した。

「ぐつ！」

ハヤタは飛ばされない様に踏ん張った。

（クソ、ガードだけで一杯一杯だぜ）

「ぐはつ！」

ハヤタは吐血した。

（ヤバい、マジで負ける！）

ハヤタは勝てる見込みが無い事に絶望した。

「あなたはもう終わりです！」

伊澄はそう言つて最後のお札を投げた。

「八葉六式、撃破滅却！」

ドカーン！ お札が大爆発し、爆風に因つてハヤタは吹っ飛んだ。

「うわあああ！」

ハヤタ、残りHP 1。

（くつ・くつ・この体はもう駄目だ！）

ハヤタは、ドラゴンハンド竜の手で自分を無理矢理肉体から押し出して魂だけの存在に成つた。

（鷺ノ宮の肉体・・・あれさえあれば俺は！）

ハヤタは伊澄の肉体目掛けて飛行した。

「いけません」

伊澄は慌てて肉体まで駆ける。

「それは俺の物だ！」

ハヤタは伊澄と同時に、伊澄の肉体へと入り込んだ。

しかし、伊澄の靈力の方が上で、ハヤタは伊澄の肉体から弾き出されてしまった。

「あなたでは勝ち目はありませんわ」

「クソツタレ！」

ハヤタは妖力波を放つた。

「お返します」

伊澄はバリアを張り、妖力波を跳ね返した。

「うわっ！」

ハヤタは間一髪で妖力波を避けた。

「なかなかやるな、鷺ノ宮 伊澄」

「あなたの方こそ、頑張りましたわ」

「正直、俺を此処まで追い詰めたのはお前が初めてだ・・・悔しいが、今回は敗けを認めてやる。だがな、これだけは覚えておけ。何時か絶対、俺はお前に勝つてやる」

「楽しみにします。では私はナギの所へ行くのでこれで失礼します」

伊澄はそう言つてお辞儀をすると、西の方へ向かつて行つた。

「待て」

ハヤタは伊澄を呼び止めた。

伊澄は振り向いて、「まだ何か？」と訊ねる。

「否、三千院家は反対だぞ」

「そうですか。態々有り難う御座います」

伊澄はそう言つて三千院家に向かつた。

ハヤタはボロボロに成つた自分の肉体に戻り、咲夜に駆け寄つて揺さぶつた。

「起きろ咲夜」

「ん・・・んんん？」

咲夜は目を開けた。

「ウチ、生きてたんやな？」

「鷺ノ宮が加減したからな」

「せやつ、伊澄はどないした！？」

咲夜はそう言つて起き上がり、辺りを見回した。

「鷺ノ宮は三千院の屋敷に行つた」

「そか・・・。そないな事より自分、ボロボロやで？」

「鷺ノ宮と一緒に戦したからな」

「で、勝つたんか？」

「敗けたよ。あいつ強えんだ」

「何や、敗けたんか・・・まあ良えわ。喫茶店入るで？」

咲夜はそう言って立ち上がり、喫茶店へと入店した。

喫茶店に入ると、既に咲夜が場所を取っていた。

「此処や此処や！」

と、手招きする咲夜。

ハヤタは咲夜の下へ行き、向かい合って座った。

咲夜はメニューを取り、ハヤタの前に置いた。

「ウチの奢りや。自分、好きな物選んで良えで」

「ああ、じゃあ珈琲で」

咲夜は店員を呼び付け、珈琲を注文した。

「ほんで自分、ウチの執事に成りたいんやな？」

「駄目か？」

「別に構わん。丁度今、巻田も国枝も病氣で入院しどるし、その間やけやつたら」

「その間つて、そいつら退院したりどつなるんだ？」

「自分の働き具合に因るで。まあ、巻田と国枝は一流やからなあ。自分にそれ以上の働きが出来るとは・・・」

「そうか」

ハヤタは自信に満ちた表情をした。

表示されるかな？

## Story 02・臨時執事ハヤタと咲夜の思ひで

三千院家の屋敷から少し離れた所に、愛沢家の屋敷はある。ハヤタと咲夜はその屋敷の空き部屋にいた。

「此処が今日から自分の部屋や、好きに使って構わん。ほな、次はウチの部屋を案内するで」

と言う訳で咲夜の自室。

「此処がウチの部屋や。ウチの部屋は本来どなたはんも入れへんけど、特別に自分だけ入れてあげまんねん」

咲夜はそう言って、ベッドに駆けて横に為つた。

「どや、ついでに先刻の続きやつてやろか？」

「先刻の続き・・・？」

ハヤタは手の平を見詰めた。

（成る程、咲夜は俺を誘つてんのか）

「よつしや、行くぜ咲夜！」

ハヤタは咲夜に飛び込んだ、が、咲夜はひょいと避け、ベッドから降りた。

「冗談や。そないな事したら桂はんに怒られてしまつわ」

「・・・別れたよ」

「へつ？自分、今何て言つたん？」

「だから、ヒナギクとは別れた、と・・・」

それを聞いた咲夜は吃驚仰天、「ホンマかそれ！？」と、素つ頓狂な声を上げた。

「何で別れたんや？」

「それが色々あるんだよ」

「そうか・・・。その話し、ねちっこく聞いても良えか？」

ハヤタは一旦考えてから咲夜に話した。

「成る程な。それは自分が悪いで」

ガーン！　ハヤタはショックを受けて暗く成つた。

「あ、スマンスマン。そないな凹まないでおへんなはれ  
しかし、ハヤタの様子は変わらず。

「せや！自分、ウチの男に成らへんか？」

「はつー？」　ハヤタは驚いた。

「ウチ、始めて自分と会つた時から、自分の事好きに為つてしまつ  
たんや。せやから自分、ウチと付き合つてくれへんか？」

と、大胆告白をする咲夜。

「お、お前本氣で言つてんのか！？」

「何や、ウチやアカンか？」

「否、別にいけなくは無いけど・・・」

「せやつたら良えやろ？？」

ハヤタは頭を抱えた。

（いきなり交際望まれた！つて、あれ？そう言えれば前にも一度こんな事・・・）

刹那、ハヤタの脳裏に真新しい過去の記憶が過ぎる。

（去年！そ�だ、あれは去年の修学旅行で京都へ行つた時だ！あん  
時は確か班を抜け出して一人で大阪へ行つたつけ。で、その大阪で  
地元の女の子と会つて一緒に一杯遊んだな。名前何て言つてたかな  
・・・）

『ウチ、愛沢　咲夜や』

（そうそう、それそれ！そんぞそいつ・・・）

『ウチ、自分の事好きやねん。せやから自分、ウチと付き合わへん  
か？』

（つてな事言つてたな。めっちゃ可愛くて好みだつたんだが、その  
日一日しか会えないから保留にしてたんだよな、確か。つて、一寸  
待て？）

「あああああ！」

ハヤタは咲夜を指差して叫んだ。

「なつ、何や！？吃驚するやないか！」

「思い出した！俺、去年お前と会つてゐる！」

「何やで？」

「だから、俺とお前は1年前大阪で会つてるんだ！」

「ドアホー！自分、ウチの事思い出すんにどんだけ時間掛かってんねん！？」

咲夜はそう言つてハリセンを出し、思いつ切りハヤタを叩き付けた。

「痛！」

「痛！やない！こないな痛みより自分に忘れられとつたウチのがもつともつと痛いで！」

精神的な物だが。

「ま、待て！謝るから許せ！」

「別に怒つてへんや。せやから、そないな事言われても困るんやけど」

ハヤタは安堵の溜め息を吐いた。

「で、どうなんや？ウチと付き合つてくれるのか？」

ハヤタは自分の胸に手を当てた。

（やべえ、心臓がドキドキしてる。あん時と一緒にだ）

「あのや、悪いんだけど、一寸待つてくれる？暫く考えさせてくれ

「嫌や！」

「何故？」

「ウチは今返事が欲しいねん」

「でも、俺どうしたら良いかまだ・・・」

ハヤタが迷つていると、咲夜がベッドに飛び乗り、ハヤタを押し倒して馬乗りした。

「いきなり何すんだよ？」

「ハヤタはん、もつと自分に素直に成らなアカンで？」

「俺は何時も素直だ」

「否、自分は迷つとる。自分、ホンマはウチの事好きなんやろ？せやつたらそれで良えねん、ウチと付き合えれば良えねん

（どうなんだろうな？咲夜は可愛いし、俺の好みだ。けど、俺はま

だ咲夜が好きつて決まつた訳じゃねえし……

「なんやつたらウチが本気にさせてやつても良えで？」

咲夜はそう言つてハヤタの上に倒れた。

「どう、その気成つたか？」

（何だよこの女は！？大胆過ぎだらー）

「何や、まだなんか」

（やべえ、目が反らせ無え。それに何なんだこの感じは。俺にいつに惚れんのか？）

「咲夜」

「何や？」

「お前と付き合つてやるよ

「ホンマか？ホンマに良えんか？」

「ああ

頷くハヤタ。

「わあ、おおきこー！」

咲夜はそう言つてハヤタを抱き締めた。

「咲夜

と、抱き締め返すハヤタ。

「なあ、ハヤタはん

「ん？」

「もし浮氣したら、ウチ許しまへん」

「しねえから安心しの」

「信じて良えか？」

「俺が嘘吐く様に見えるか？」

「解つた、ウチ自分を信じる」

咲夜はそう言つて、目を瞑つて寝てしまった。

（こいつ、寝ちまいやがつた。つうか、俺も眠い）

ハヤタは大きな欠伸をして眠りに入った。

## Story 03・頬にハヤタのキス、普通は逆だわな

翌朝、咲夜は田を覚ました。

田の前にはハヤタの寝顔がある。

(せや。ウチ、あのまま寝てもうたんや)

咲夜は起き上がるうと力を入れるが、体が動かなかつた。

(は、ハヤタはん・・・。ウチは抱き枕やないで?)

咲夜は恐る恐るハヤタの頬をツンツンした、が、ハヤタは顔を引き攣らせるだけで起きない。

「なあ、ハヤタはん。起きてくれへん?」

「んん・・・?」

ハヤタは薄田を開けた。

田の前には咲夜の顔。

「なつ、咲夜! 何故お前が俺の上に! ?」

「何言うてんねん自分? 自分が昨日ウチを抱いて・・・あれ? ・・・アカン、何も覚えとらんわ。そないな事より放してくれへん?」

「あ、悪い」

ハヤタは咲夜を解放した。

「そや自分、料理作れるか? 今この屋敷、メイドはんがおらへんのや。せやからハヤタはんにお願いしよかと思つてんねんけど・・・」

と、言つてゐる間にハヤタは消えていた。

「つて、何処行つたんや! ?」

咲夜の部屋を跡にしたハヤタ。彼は今、食堂で料理を並べていた。

「うむ、上出来だ」

ハヤタそう発して廊下に出た。

「咲夜ー!」

ハヤタは叫び、屋敷中に声を響かせた。

自室にいる咲夜は、慌ててハヤタの下に駆けた。

「何や、そない大声出して！？」

「飯が出来た」

「アホ、そないな事なら呼びに来れば良えやろ」「いや、そしそうかと思つたんだけど、呼びに行くの面倒だつたから・・・」

「ドアホー！そないなんで執事が勤まるかつちゅうねん！」

咲夜はそう言つてハリセンで攻撃して来た。

ミス、ハヤタにダメージは無い。

「なつ、ウチの突つ込みを避けるとは！？」

「残念だつたな、当たらなくて。そんな事より、早く飯食わんと付けるぞ」

「アカン、忘れとつたわ」

咲夜はそう言つて食堂に入つて席に着き、食べ始めた。

「おつ、こら美味いで！ハルが作るんより美味や！」

「そつか、それは良かつた。何しろ始めて作ったから」

「なつ、自分、料理始めてなんか！？」

「ああ」

「そか。それにしても美味しいで。これならなんぼでも食えるつちつ  
訳や」

「よ、よせや。お世辞なんか要らん」

「お世辞やないで。ホンマに言つとんのや」

「ほ、本当か？本当に美味しいか？」

「ホンマ美味いで」

それを聞いたハヤタは、後ろから咲夜に抱き付いた。  
ゲホツとむせる咲夜。

「自分、いきなり何すんねん！？」

「嬉しいな。咲夜が美味しいって言つてくれて」

ハヤタはそう言つてチヨツと言つ擬音を立てて咲夜の頬に唇を付けた。

途端、咲夜の顔が真っ赤に染まって白煙を噴いた。

「どうした咲夜!? 顔が真っ赤だぞ! 熱でもあんのか?」

「し、心配せんでも大丈夫や」

その時、二人は背後に視線を感じた。

「誰や?」

と、咲夜は振り向いた。その先には、メイド服を着用した白皇学

院生徒会書記の春風はるかぜ 千桜が顔を真っ赤に染めて立っていた。

「はつ、ハルさん何時からおつたんや!-?」

「えつ、えつと、その・・・」

千桜はオドオドし始め、

「あの、咲夜さんの『ホンマ美味いで』つて所から・・・

「要しはるに、ウチが抱き付かれてる所からやな?」

「そ、そうですね・・・」

重い空気が流れれる。

「ひょつとして、春風さん?」

千桜ギクッとして焦った。

訊ねたのはハヤタだ。

「何や? 一人とも知り合いなんか?」

その問いに千桜が頷き、「白皇の同級生だ」とハヤタが答える。

「え、えつと、それじゃあ私はお邪魔な様なので!」

千桜はそう言って慌てて去つて行つた。

「何かウチ、朝飯食べる氣失せてしもうたわ」

「駄目だ。朝食はちゃんと摂らんと体が保たねえぞ?」

「そないな事言つても、食欲失せたもんは仕方無いやないか

「・・・・・・・・・じゃあ片付けるぞ」

「好きにせえ」

咲夜はそう言つて食堂を跡にした。

ハヤタは咲夜の食べ残しを片付ける為、さつさと皿に詰め込んで食器を洗う。

「朝食要らなく成つたな」

## Story 04・一人は入れ替わる

その日の早朝、ハヤタは咲夜の部屋で目を覚ました。

（何で俺、咲夜の部屋で・・・？まあ良つか）

ハヤタは背中をグッと伸ばし、ベッドから出、部屋を出て洗面所へ向かった。

「あれ？」

普段は腰ぐらいの高さしか無い洗面器が、何故か今日は胸の前にある。どう言う事なのだろうか・・・？ 疑問符。

ハヤタは辺りを見回し、台に為る物を探す。

（あつた！）

ハヤタは咲夜が顔を洗う時に台にして使う四角い木の枕を見付けた。そしてそれを洗面器の前に置いて乗つかり、蛇口を捻つて水を出し、顔を洗つた。

（今日の俺の体変だな）

と、濡れた顔をタオルで拭いて何気無く鏡を覗くハヤタ。

ハヤタ曰く、超可愛い咲夜の美顔が鏡に写っている。

「あ、起きたのか。咲夜」

ハヤタは振り向いたが、その先に咲夜の姿は無い。

「あれ？」

ハヤタは疑問符を浮かべながら再度鏡を覗き込む。

「そんなバ力な！？」

と、ハヤタが驚いて感嘆符を浮かべると、鏡の中の咲夜が全く同じ様に驚き、感嘆符を浮かべる。

（待て！これはきっと見間違いつて奴だ！咲夜の事ばつか考えてからこんななのを見るんだ！）

ハヤタ改め咲夜は目を瞑り、深呼吸をして目を開く。

「何で・・・？」

咲夜は疑問符を浮かべた。

(そう言えば声も・・・)

咲夜は発声してみた。

「あいうえお」

驚いて感嘆符を浮かべる咲夜。

「俺咲夜に成つてゐる！？」

咲夜は胸に手を置く。

(落ち着け俺！兎に角、今は落ち着いて咲夜を演じよ！)

咲夜は目を瞑つて深呼吸をし、そつと目を開けた。目の前には、ハヤタが驚いた顔をして立つていた。

「何者や自分！？」

「何者つて、ハヤタはんウチの事忘れてもうたんか？ウチや、咲夜  
や」

咲夜はそう言つてハヤタを見つめる。

「何言うてんねん！？咲夜はウチや！」

ハヤタは懐に手を突つ込む。

「あれ！？ウチのハリセン何処や！？」

(・・・この、目の前にいる俺、もしかして・・・)

「お前、ひょつとして咲夜か？」

咲夜はハヤタに真顔で訊ねた。

「そうや！何か文句あるんか！？」

そう言つてハヤタは咲夜に襲い掛かる。

「落ち着け咲夜！俺だつ、ハヤタだ！」

その言葉にハヤタの拳が咲夜の眼前約1ミリで止まった。

「咲夜、鏡を見るんだ」

ハヤタは言われた通りに鏡を覗いた。

「なつ、何やねんこれは！？ウチ、ハヤタはんに成つてゐるで！？」

「どうやら、俺達は互いの心と体が入れ替わつてしまつたらしい

「何やで！？」

「どうしてそうなつたかは知らんがな」

ハヤタは俯いた。

「なあ、ハヤタはん？」

「うん？」

「や、やっぱ良えで。ほな、ウチ朝食作つて来るで。せやからハヤタはんは席着いて待つとき」

「えつ・・・？」

（一寸待て！咲夜が朝食を作る！？それマズイよ！）

咲夜は洗面所を跡にしおりとしているハヤタの腕を掴んで引き留めた。

「食事は俺が作るから、咲夜は休んでてくれ」

「せやけど、今の自分、何処からどう見てもウチやで。ウチが料理作つてる所見られたら大変な事になるで」

そう言つた刹那、咲夜の姿が消えた。

「ちよつ、ハヤタはん何処行つたんや！？」

台所では、咲夜が朝食を作っていた。

今朝の献立は白米、田玉焼き、レタス、ワインナー、味噌汁。  
「朝食定番のメニューではないか」と言うのは若本ヴォイスである。

その声に対しても咲夜は、「えつ、そうなの？」と天井に顔を向けて言つた。

「ハヤタはーん」

と、台所にハヤタが入つて来る。

説明するまでも無いが、彼の中身は咲夜である。

「咲夜か。丁度良い所に来た。今朝食が出来た所だ」咲夜はそう言つて朝食を食堂に運んだ。

ハヤタが席に着く。

「なあ、ハヤタはん？」

「ん・・何だ？」

「ウチら、何時んなつたら元に戻れるんやろか？」

「知るか。つうか俺らが戻れなくても困る事なんて別に無いだろ」

「困る事ならあるで？」

「ほほお。例えば？」

ハヤタは頬を赤らめた。

「・・れや・・ろとかや

「あ？」

「せ、せやからつ、トイレやお風呂とかやー」

「何だ、そんな事か」

「そないな事とは何やー?ウチは恥ずかしゅうて先刻からトイレ我慢してんのや!」

「あつ、俺も行って無え!」

我慢に限界を感じたのか、咲夜は慌ててトイレまで駆け、用を済

ませて食堂に戻った。

「ハヤタはん、ウチの見たな？」

ハヤタは席を立ち、咲夜を張つ倒して馬乗りした。

「な、何だよいきなり？つうかまだ心の準備が！」

と、その時だった。

メイドの春風 千桜が現れ、「朝月くん、朝っぱらから何咲夜さんの事襲つてんですか？」と訊ねた。

「は、春風さん何時からそこに！？」

ハヤタはそう言いながら、感嘆符と疑問符を浮かべた。

「今来た所です。それより朝月くん、早く退かないと咲夜さんが可哀想ですよ」

ハヤタは咲夜をチラツと見た。

「（俺の印象が悪く為るから早く退け）」「

咲夜は小声で言つて睨んだ。

（何やつてんねんウチは！？）

ハヤタは慌てて咲夜の上から退く。

「男として目覚めた咲夜だった・・・」

ハヤタは疑問符を浮かべ、「今の誰や？」と首を傾げた。

「ただの傍観者である」

と、若本ヴォイスが聞こえた。大方、先刻のもそれだろう。

「あの、誰と話してんんです？朝月くん」

ハヤタは目を点にした。

（えつ、ハルさんには聞こえてへんのか？）

「自分の頭を疑う、咲夜である」

ハヤタはその声が聞こえた方に向かつて「喧しいわ！」と鋭く睨み付けた。

「て言うか朝月くん、何故に関西弁？」

ギクッ！ ハヤタは硬直した。

すると咲夜が起き上がつてハヤタのフォローを始めた。

「何やハルさん、知らんのか？ハヤタはんは昔、大阪に住んどつた

んや。大阪弁喋れても可笑しくあらへんで」

と言つのは事実で、ハヤタは昔、幼稚園の頃だが、大阪に住んで

いた。当時の家は、愛沢家の隣だったと言う。

「成る程、そうでしたか。てつくり、一人の体が入れ替わったのか  
と思いましたよ」

「グサツ！　咲夜の心を槍が貫く。

「どうかしたんですか？」

（バレてんじやねえか・・・！）

「ハヤタはん、こいつハルさんやないで！」

そう言つたのはハヤタだった。

「ハルさんはこないな事言つ人じやあらへん！自分、一体何者や！？」

「クツクツクツ、バレては仕方あるまい」

千桜はそう言つて、顎に爪を引っ掛け、千桜マスクを外した。

咲夜とハヤタは驚いて感嘆符を浮かべた。

千桜マスクの下から出てきたのは、ヒナギク・・・否、鮫島 夏  
奈子だった。

鮫島 夏奈子。彼女は前作で鎌鼬が憑依したナギに軽く捻伏せられた雑魚である。

「桂はん！？」

咲夜は首を横に振つた。

「違う・・・」

そう言いながら後退る咲夜。

「どないしたん？」

ハヤタが訊ねた。

「うわあああ！」

咲夜は頭を抱えて叫び、瞳が操られた人の如く真っ黒に染まる。

「どうやら実験は成功の様ね」

「実験？」

ハヤタは疑問符を浮かべる。

「世界中の人間と人間の心と体を入れ替える実験よ」

「なつ、やからウチとハヤタはんが入れ替わつてもうつたんか。せやけど何でそないな事したんや？めつさ迷惑なんやけど」

「桂 ヒナギクの体を手に入れる為よ」

刹那、咲夜の脳裏をヒナギクの笑顔と『ハヤタくん』と言つその声が通り、彼女は瞳の色を取り戻した。

（ヒナギク！？）

咲夜は首をブンブン振つた。

（否、アイツとは別れたんだ！けど、この気持は一体・・・？）

「まあ、安心して頂戴。あなた達の事はちゃんと元に戻してあげるわ。桂 ヒナギクと入れ替わつてから」

「目的は何だ！？あいつと入れ替わるからには何か理由があるんだろ！？」

咲夜は無意識に叫んだ。

夏奈子が咲夜を睨む。

「何か？」

「い、否、何でも無いです」

（やつぱり怖い・・・）

咲夜は恐怖で体が震えた。

（でも、このまま何も為なればヒナギクを奪われる）

咲夜は台所に素早く駆け、ナイフを手にして夏奈子に襲い掛かつた。

夏奈子は左腕を盾にした。

カン！ ナイフが弾き飛ばされた。

驚いて感嘆符を浮かべる咲夜。

「んなアホな！？ナイフ素手で受け留めよつたで！有り得へんやろ！？」

そのハヤタの発言に、夏奈子は説明する。

「実は私、口ボットなのよ」

そう言つて夏奈子は懐からメスを取り出し、腕をスパツと裂いた。

切れ目から真っ赤な液体が滲み出でくると、夏奈子はそこに爪を引っ掛け手袋を脱ぐ様な感じに引っ張った。

肉が剥がれ、金属の棒が露に成った。

「て言うかハヤタ、シモベの分際で私に楯突くなんて100年早いわ」

夏奈子はそう言って咲夜の鳩尾を殴り付けた。

「がはっ！」

咲夜は吐血して床に倒れ込んだ。

夏奈子がハヤタの方を向き、歩み寄ろうとすると、ガシッと咲夜が足を掴んだ。

「どうでも良いが俺らを元に戻さねえか？」

「おつと、そうだったな」

夏奈子は徐に何かを取り出した。

それは二つの錠剤だった。

「これであんた達を入れ替えたのよ」

そう言って錠剤を一人に渡す夏奈子。

「飲みなさい」

咲夜は飲み込んだ。

ハヤタは警戒しながら飲み込む・・・。

その瞬間、目眩が起きて一人の意識が入れ替わった。

「おつ、元に戻つたで！」

と、咲夜が大喜びで飛び跳ねた。否、実際には飛び跳ねてはいな

いが。

「昨夜のご飯に入れたな？つうか春風さんはどうした？」

夏奈子はニヤリと笑った。

「なつ、まさか！？」

「安心し給え。春風と言つ女は無事だ」

「それなら良い。さて、ヒナギクの件に変わろう。あなたはヒナギクと入れ替わるとか言つ訳だが？」

「その通りよ」

「理由は？」

ハヤタはそう言つて、右手を顔の前で竜の手に変化させた。

「何だその醜い手は？」

「なつ、醜いとは何だ醜いとは！？」

「醜いから醜いのよ！」

夏奈子はそう言つた後ハヤタを殴つて怯ませてから「昇竜拳！」

と回転アッパーを放つた。

「うわっ！」

宙に舞うハヤタ。

「ねえハヤタ、桂ヒナギクの居場所知つてる？自宅へ行つても五月蠅い姉がいるだけで会えなかつたのよね」

ハヤタは床に背中を着いて跳ね上がり、腹這いに成つて止まつた。

「知つてどうする？」

「行つて捕まえるのよ。乗つ取る為にね

「乗つ取る？」

「ええ、こうやって」

夏奈子はそう言つて、咲夜の背後に光速で移動した。

驚いて振り向く咲夜。

夏奈子は体内から銀色の液体を出し、咲夜にぶつ掛けた。銀色の液体が咲夜の体内に徐々に浸透していく。

「体が動かへん！何なんや！？」

ドタツ！ 夏奈子は気を失つて倒れた。

「お前、人間に自由に乗り移れるアンドロイドだな？」

「御名答」

と、咲夜が笑む。

「薬関係無えじやん！」

ハヤタは突つ込み、咲夜に殴り掛かったが、既の所で止まつた。

原因は咲夜の「私を殴つたらこの小さくて可愛い体に傷が付くぞボディ？」と言つ葉だ。

それだけは絶対に出来ないハヤタ。だから寸止めをしたのだった。

「バーク」

咲夜はそう言つて手前で止まつたハヤタの腕を掴み、背負い投げをした。

「ダン！」 ハヤタは背中を床に叩き付けられた。

「お前、知つてゐる顔だからつて理由で攻撃を躊躇うタイプだな。死ぬぞ？」

「悪かったな」

「お前らしくて良いがな。それより桂 ヒナギクの居場所を教えて貰おうか」

「その前に貴様の正体を見せる」

「良いだろ」

咲夜がそう言つと、体内から銀の液体がまるで脱皮するかの如く出てきて、彼女の後ろで金属のロボットに構成された。

ハヤタは躊躇めきながら立ち上がって「そいつが貴様の正体か？」と訊ねた、御名答。

「さあ、桂 ヒナギクの居場所を言つて貰おうぞ」

「そいつは言えねえな」

「そうか、残念だ。教えればシモベから彼氏に昇格してやつたのに」

「誰がシモベだ！？ つうか女は間に合つてるわ！」

ハヤタは金属生命体に殴り掛かる、が、それが液化してしまい、物理攻撃が効かない。

「私に攻撃は効かんぞ。それとも、桂 ヒナギクの代わりに貴様を乗つ取れと？」

「その質問に答える前に俺の質問に答えて貰おうか。何故お前はヒナギクを乗つ取ろうとする？」

「何故？ 全宇宙で誰よりも強いからだ」

「違うな・・・」

「何？」

「全宇宙で誰よりも強いのは俺だ」

「ほお、ならば貴様を乗つ取つてやろうか？」

「却下だ」

ハヤタはそう言つて腕を金属生命体から抜いて飛び退いた。

「来い、かまいたち！」

その声に反応し、何処からとも無く真剣に変化した妖刀かまいたちが飛来し、ハヤタの手に収まった。

「最初に言つておく！俺はつ、かーなーり、怒つてる！」

「貴様が怒つた所で怖くも何とも無いが？」

金属生命体はそう言いながら、辺りを見回して何かを探した。  
「そう言えば貴様は何かと融合しなきや力を發揮できない雑魚だつたな」

その発言に金属生命体は額に怒りマークを出現させた。

「う、五月蠅い五月蠅い五月蠅い！」

そう言つてまた何かを探し始める金属生命体。

「表に車が路上駐車されてるぜ」

その言葉を聞いた金属生命体は颯爽と外へ出て行つた。

「そしてハヤタはそれを追うのだった。と言つて、次回はハヤタ VS・トラ スフォーマーをお送りする」と、若本ヴォイスが聞こえた。

To be continued . . .

愛沢家敷地周辺。謎の金属生命体はハヤタの眼前で路肩に停めてあるGT-APEX AE86TURENOと融合した。

「トランسفォーム」

その言葉と共に、86がロボットに変形した。

その大きさは、一階建ての家を優に超している。

「でっけえなあ。だが相手にとつて不足は無え！」

ハヤタはそう言ってかまいたちを禍殿鎌鼬に変化させた。

「行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ！」

と、金属生命体に接近し、斬り掛かるハヤタ。

金属同士がぶつかり合い、キンッと音を立てる。

「そんな玩具如きで私が斬れるとでも思つてゐるのか？」

「どんだけ頑丈なんだテメエは？」

と、ハヤタは一旦退いて斬撃波を飛ばした。

だが、金属生命体は対してダメージを受けず、軽く躊躇するだけ

だった。

「全然、痛くも痒くも無いんですけど？」

金属生命体はそう言つてハヤタを見下ろした。ロボットなので表情迄は解らない。

「どうでも良いがお前に一つ訊きてえ」

何？ と、金属生命体が疑問符を浮かべる。

「夏奈子には何時から入つてたんだ？」

「潮見に転入した時には既に入つてたわ。あんたに近付く為にね

「俺に？ 一体何が目的で？」

「あんたを従わせてこの星をあんたと一緒に征服するのが目的。あ

んたがいれば地球人なんてあつと言つ間」

「折角の誘い有り難いが、生憎俺は今の地球が好きなんでね。変えるつもりは毛頭無い！」

ハヤタはそう言つて真空斬りを放つた。

だが金属生命体は微動だにしない。

(傷一つ負わねえ！俺こいつに勝てるのか！？)

ハヤタが戦略を練つていると、金属生命体が彼を薙払つて來た。

(しまつた！)

ハヤタは慌てて鎌鼬でガードするが、受け止め切れずに吹つ飛んで宙に舞つた。

「残念だよ。あんたみたいなのが私の手下に成つてくれなくて」

金属生命体はそう言つて宙に舞うハヤタを手を組んで叩き、地面に叩き付けた。

「うつ！」

背中を打ち付けたハヤタの顔が引き攣る。

「踏み潰してあげるわ」

金属生命体はそう言つてハヤタを踏み潰した。地面に足が着き、砂埃が舞う。

「ふつ、死んだみたいだな」

その時、金属生命体の足が持ち上がつた。

「悪いなあ。咲夜残して死ぬ訳にはいかねえんだ」

ハヤタはそう言つて金属生命体を上空に放り投げ、センコウクウラに変身して飛び上がつた。

「先ず一撃目！鮫島 夏奈子の分！」

と、金属生命体を地面に叩き付けるセンコウクウラ。

「次は咲夜の分！」

センコウクウラは急降下為て金属生命体に激突した。

「ぐわつ！」

クリティカルヒット。金属生命体の腹に風穴が開き、大ダメージを負う。

「そしてつ、俺の分だあ！」

センコウクウラは上空へ飛び上がり、巨大な火の玉を吐き出した。

金属生命体は86から分離し、飛び上がつて火の玉を避けてセン

「ウクウラの口に飛び込んだ、が、センゴウクウラの火炎放射に因り金属生命体は外へ飛び出した。

「往生際が悪いな。お前では俺には勝てない事ぐらい……！？」

その時、センゴウクウラは金縛りに襲われ、地面に落下した。

「貴様、何をした！？」

「何をしたか？教えてあげる。あなたの口に入つた時に私の体の一部をあなたの体内に入れさせて貰つたわ。これであなたは私の思うがまま」

「そうか」

センゴウクウラはニヤリと笑みを浮かべ、唾と共に銀色の何かを吐いた。

「貴様の一部つてのはこれか？」

「ど、どうして……！？」

「貴様如きでは俺を操る事も乗つ取る事も出来ないって事だ！」

「ならこれでどうかしら？桃太郎印のキビダンゴ！」

それっ！ と、金属生命体は団子を取り出してセンゴウクウラの口目掛けて投げた。

刹那、センゴウクウラがハヤタの姿に戻り、皿を団子にして口にくわえ、咀嚼して飲み込んだ。

金属生命体が「食つたわね」と北叟笑んだ。

疑問符を浮かべるハヤタ。

「朝月 隼太。桂 ヒナギクを連れて来なさい」

金属生命体は言つた、「嫌だね！」とハヤタは断つた。

「そんなバ力な！？」 と、金属生命体は団子の期限を見た。

「ちよつ、何コレ！？期限切れてるじゃないのよ！」

この団子は相手に食べさせると永久にシモベとして操る事が出来るが期限が切れると効力を失うのだ。

ハヤタは光速を遙かに上回る速度で金属生命体の前に着き、「残念だつたな」と言つて刃を突き刺した。

「グサッ！」 禍殿鎌鼬が金属生命体の胸を貫く。

金属生命体は悲鳴を上げ、溶けて液体に成った。

ハヤタは禍殿鎌鼬を木刀に戻し、上空へ放り投げた。そして、屋敷内に戻った。

中では未だに夏奈子が眠っていた。

ハヤタは徐に近付き、夏奈子を起こす。

「こ、此処は・・・？」

と言うのは目を開けた夏奈子の第一声。

「鮫島 夏奈子さん？」

夏奈子は疑問符を浮かべた。

「あなたは？」

「朝月 隼太です」

「そう。あなたが助けてくれたの？」

その問いにハヤタは微笑んで頷いた。

夏奈子は素早く起き上がり、「有り難う御座います！」とハヤタの首に腕を巻き、大胆にも顔を近付けてチュッと音を立てて接吻をした。

顔を真っ赤に染め上げるハヤタ。

「か、勘違いしないでよ？助けてくれたお礼なんだから」

「お礼だとしても普通はしないわな」

と言うのは若本ヴォイスだ。

「う、五月蠅いわね！アメリカでは挨拶代わりに接吻するのよ！？」

「此処は日本だがな」

「・・・・・・」

沈黙する夏奈子。

「ハヤタはん」

と、咲夜が彼の肩を数回、軽く叩いた。

「何だ？」

と、振り向くと咲夜がハリセンで顔面を引っ叩いた。

「バシン！」 と凄い大きな音が部屋中に響いた。

「いってえ！何為んだよ！？」

「」

「自分、誰と付き合つてゐるか解つとんのか！？ウチとやでー？ウチ！なけどウチとは一度もキッスせずに他の子とキッスか！この女つたらし！」

今迄に無く怒り狂う咲夜をハヤタは宥め様とするが、「もう一度と面見せんといて！」と言つて去つて行つた。

「さ、咲夜？」

ハヤタは目を点にした。

「と言う訳で、次回は咲夜が事件に巻き込まれます」と、若本、ヴォイス。

桃太郎印のきびだんじはドラえもんの秘密道具だが小学館的に問題は無いので悪しからず。

咲夜は少し怒っていた。理由はハヤタが夏奈子と接吻をしたからである。とは言つても、夏奈子の方が一方的にしただけであるが…。

「はあ・・・・」

咲夜は溜め息を吐いた。

（ウチ、ハヤタはんに悪い事してしまつたな。怒つてへんやろか？）  
（こいつしてもしゃあない。ハヤタはんに謝りに行こいつ）  
はあ・・・・ と、再び溜め息。

咲夜はベッドから降り、部屋を出て食堂に足を運んだ。  
しかし、ハヤタは居ない。ついでに言つと夏奈子も居なかつた。  
一人で何処か行つてしまつたのだろうか？

咲夜はそんな事を考えたが、直ぐに首を振つて思考を搔き消した。  
(ハヤタはんに限つてそないな事ある訳無いやないか)

咲夜はそう思い、食堂を跡にしようとするが、メイドの春風 千  
桜と鉢合させした。

「あ、ハルさん

「咲夜さん」

「せやハルさん、ハヤタはんが何処に居るか知らんか？」

「朝月くんですか？彼なら先程、私の学校の生徒会長さんと喫茶店  
で一緒にいるのを見掛けましたが、何だか良いムードでしたので声  
も掛けずそのまま放つておきました」

「何やて！？ハルさん、その喫茶店は何処や！？」

「え、確か毛李探偵事務所もうりたんていじむしょの下にあるマープルだった様な・・・つ  
て、一寸咲夜さん！？」

咲夜は千桜のマープルと言つ所で、既に食堂から立ち去つていた。  
同じ頃、都内の何処かにある毛李探偵事務所の下にある喫茶店マ  
ープルでは、夏奈子がハヤタに相談を持ち掛けっていた。

「え、生き別れに成った妹を捜してる?」

ハヤタの言葉に夏奈子は頷いた。

「詳しく聞かせてくれないかな?」

その問いに夏奈子は再度頷き、妹の事を詳しく話し始めた。

夏奈子の話では、12年前、自分が4歳の時に両親に捨てられ、鮫島の義父母に拾われ、養子に成ったと言つ。

捨てられる直前、自分そつくりの女の子、恐らく妹らしき人物が、『お姉ちゃん』と連呼しているのを覚えていた。その為、彼女は自分に妹がいるのでは無いかと考え、ずっと捜していると聞つのだ。

「成る程ね」

ハヤタはそう言つて暫し考え込む。

(鮫島さんの双子の妹。心当たりが無い訳じゃ無いんだけど……まさかね)

と、ヒナギクの笑顔を浮かべるハヤタ。

(否、違う!)

ハヤタは首を数回横に振るつてヒナギクの幻影を搔き消した。だが、何度も現れるので手に負えない。

「どうかしたの?」

夏奈子は訊ねた。

「あ、否、一寸考え方を……。それより妹の件、調べても良いよ」「えつ、ホントに!?」

ハヤタは頷いた。

「でもや、何で上行かないの?」

上と言つのは毛季探偵事務所の事である。

「それはあなたと一緒に……」

ハヤタは疑問符を浮かべた。

「否、何でも無いわ。気にしないで」

夏奈子はそう言つてニコッと微笑んだ。

ハヤタはその笑顔に胸がキュンとしてドキドキした。

(か、可愛い。ヒナギクの笑顔を見てみたいだ。……って、俺

は何を考えてるんだ！？俺には咲夜がいるでは無いか（）

一方、咲夜は、途中にある負け犬公園である光景を目の当たりにしていた。

それは、黒い人が女性を刺し殺した瞬間だった。

咲夜は腰を抜かし、悲鳴を上げた。

黒い人は咲夜に気付き、辺りに気を配りながら咲夜の下にやつて来た。

「咲夜危うし！」と言う訳で次回は、夏奈子の妹捜しを御送りする」と言うのは若本ヴォイスである。

「誰だ！？」

黒い人は辺りを見回しながら言った。

「傍観者である」

「はあ！？強姦者！？何だか知らんが出て来い！」

「傍観者です。後で覚えておいて下さーい」

その言葉に黒い人は恐怖を覚えた。

## Story 08・ハヤタの分裂

ハヤタは町中で聞き込みをしていた。しかし、夏奈子の妹情報は未だ掴めずである。

「ねえ、いい加減諦めて、あそこに頼りましょうよ」

夏奈子はそう言つて毛李探偵事務所のイメージを頭上に浮かべた。が、しかしそれをハヤタが搔き消しながら答える。

「駄目だあそこは！前に一度使つたが全然役に立たない！高い金だけ取つて後は適当。事件の捜査なんてコソの毛さん並だよ」

「そ、そなんだ

「だから俺たちが自力で」

そう言い掛けた時、ハヤタの背が少しばかりか縮んだ。

「あれ、僕は一体？」

「あ、朝月くん！？びびしたのよ一体！？」

その言葉にハヤタは夏奈子の方を振り向いた。

「うわっ！か、夏奈子さん！ぼ、僕に何か用ですか？」と体をブルブル震わせて脅える。

「皆は覚えているであろうか。何を隠そう、朝月 隼太。彼は二重人格であり、主人格と入れ替わると裏人格の記憶が失われるのだ」と言つるのは若本ヴォイスである。

「ちょ、どうしたのよ！？」

そう言つてハヤタに近付く夏奈子。

「こ、来ないでよ・・・。うわあーん！」

ハヤタは泣きながら去つてしまつた。

「待つて朝月くん！」

しかし、彼にはもう届かなかつた。

夏奈子の魔の手から逃げのびたハヤタは、負け犬公園のベンチに

座っていた。

(僕、今まで何してたんだ?「うーん、思い出せないなあ。そう言えば夏奈子さんが居たけど、もしかして僕、今まで操られてたのかな?)

「よつ、お前こんな所で何してるんだ?」

とそこに現れたのは、13歳で白皇の高等部に入ったナギだ。

「えつと、君は?」

「なつ、お前この私を忘れたと言うのか!..?」

「ごめん、覚えてない」

「三千院 ナギだ。思い出したか?」

ハヤタは首を横に振った。

がつくしと頃垂れるナギ。

「うつ・・・!」

ハヤタは呻き、頭を抱えた。

「おい、大丈夫か!..?」

と言うナギの心配をよそに、ついにハヤタは意識を失った。

ナギは慌てて彼を背負い、自宅の自分の部屋にあるベッドへと運んだ。

「う・・・うん?」

意識を取り戻したハヤタが目を開けた。

「目が覚めたか」

「此処は・・・?」

「私の家だ」

「そう・・・。あの、僕は今まで何をしてたのでしょうか?先刻の公園の近くで出会ったマリアさんと交際するって決まった所までは覚えてるんだけど・・・」

「相当酷いな、お前の記憶喪失」

「記憶喪失?僕ですか?」

「ああ、そうだ。それと一つ教えとくが、今お前はマリアとは付き合っていない。別の奴、ヒナギクと付き合っているのだ」

「ヒナギクさんを知ってるんですか？」

「知ってるも何も同じ学校だ。それよりお前に何故ヒナギクの事を知っているのだ？」

「それは僕と彼女が剣道界で1、2を争う仲だから」

「そうなのか？」

「うん。それよりヒナギクさんは？彼女が僕の恋人なら、早く逢つて話しがしたい。もしかすると僕の事何か聞けるかも知れないし」

「否、それは無理だよ。あいつは、お前が居なくなつた後、お前を捜して旅に出でしまつた。今頃、宇宙空間にでも居るんじゃないかな？」

とナギが喋つている頃、ヒナギクは地球から何万光年と離れた宇宙の何処かを彷徨つっていた。

因みに宇宙服が無くても平気なのは、竜神のお陰である。

「僕が居なくなつたって、どう言つ事？」

「お前が怒つて振つたんだよ、ヒナギクを。で、あいつはお前に謝る為、お前を捜しに行つたんだ」

「そ、そうなのか。悪い事したな」

とその時、激しい頭痛がハヤタを襲つた。

頭を押さえるハヤタ。

「お前、大丈夫か！？」

「うつ・・・！」

呻くハヤタ。背中に穴が開き、中からもう一人のハヤタが出てきた。

「うおー！」

驚き、ワクワクするナギ。

もう一人のハヤタは、背中から完全に抜け出した。

「主人格の奴目。俺を抑えやがつて」

## Story 08 ハヤタの分裂（後書き）

二つの人格が分離、と言つて凄い展開になりました。この後、一体どうなる！？

今日は地球を離れて遠い異星の話しあ話をしよう。

## Story 09 · G illes 581 のヒナギク

地球から20・5光年離れた場所に位置する地球と環境が似た惑星。G illes 581と書いた赤色矮星の周りを13日の周期で公転している。

その惑星には大気が有り、水が有り、生命が存在する。

ヒナギクはそこで、その住人達に混ざつて働かされていた。

「全く、何で私がこんな所で働かなきやいけないのよ」

「ソコ、テガトマッテイルゾ！」

（何か言つてるし）

どうやら地球の言葉では無いらしい。

（ぐしつ！）

ヒナギクが重労働に疲れてボーッとしていると、ケツを思いつ切り蹴られた。

「痛いわね！ いきなり何すんのよ！？」

ヒナギクは怒るが、相手には通じていない。

「サボラズニハタラケ」

そう言つと相手は去つて行つた。

（言葉が通じないのが余計腹立つ！ あー、屹度ハヤタくんなら通訳出来るんだろうなあ・・・）

「はあ・・・」

ヒナギクは溜め息を吐くと、作業を始めた。

作業と言つても、宇宙船から降ろされた荷物をターミナルビルに運ぶだけ。とても簡単な作業だ。しかし、この惑星は重力が地球の5倍も有る為、地球上居る時より荷物がとても重く感じられるのだ。

「はあ・・・これでお終い、と」

ヒナギクは持つていた荷物をベルトコンベアに載せて額の汗を手の甲で拭つた。

「お疲れ。あんた、あまり見掛けない顔だけど、外の星から来たの

？」

解る人が居た。

ヒナギクは驚いて振り向く。

その先には、黒の長髪につり田が似合ひ可愛い少女の姿が在った。

「あの、言葉解るんですか？」

問い合わせながらヒナギクは少女を改めた。

お尻には細長くて可愛らしい尻尾が在った。

「否、解らないわ」

「でも、ちゃんと通じてるじゃない」

「それは翻訳あんパンのお陰よ」

言つて少女は懐からあんパンを取り出した。

「翻訳あんパンってドラえもんですか？」

といつもの若本ヴォイス。

「今は何よ！？」

驚いた少女は上を向いた。

「どうかしたの？」

ヒナギクが不思議そうな顔で訊く。

「ううん、何でも無い」

少女はヒナギクの方を向いて答えた。

「？？？」

「それより、私の質問に答えてくれる？」

「質問？」

「外の星から来たのか、と言つ質問よ」

「うん、そうよ。地球つて所から来たの」

「ふうん。何しに？」

「一寸人を捜しに」

「誰を？」

「言つても屹度解らないわよ。まあ、一応この人なんだけど」

言つてヒナギクはハヤタが写つた写真を取り出した。

少女は写真に写つている人物を見て顔を顰めた。

「あなた、この方とどういつ関係？」

「知ってるの！？」

「私の質問に答えて」

「えっと、その・・・」

付き合つてた、とは言葉に出来ないヒナギクだつた。

「まあ良いわ。あんたがこの方とどういつ関係かなんて私には関係無いし」

ヒナギクは「ふう」と安堵の溜め息を吐いた。

「この方を私が知つてゐるかどうか知りたいのよね。勿論知つてゐるわ。此処じや何だし、家に来てくれる？詳しく話してあげる」

言つて少女はヒナギクを自宅に案内した。

煙突の付いた半円の白い建物。それが少女の住むお家だ。

「とても小さい家ね」

「貧しいのよ。仕事してもらくな金は入らないし。入つて」

少女はドアを開けてヒナギクに入るよう促した。

ヒナギクは堂々と家の中に入り、靴を脱いで上がり込む。

「そこに椅子が有るから座つて待つて。今、お茶入れる」  
ヒナギクは辺りを見回し、椅子を見付けるとそこに腰掛けた。  
目の前には大きな木のテーブルが一個在る。

それから暫くして、少女が茶菓子を持つてきた。

「どうぞ」

お茶をヒナギクの前に置き、向かい側に座る。

「あれは五年くらい前だつたかしら」

何の前触れも無くいきなり始まる少女の昔話。

ヒナギクは戸惑う事無く耳を傾けた。

「この星にね、小型の宇宙船が墜落したのよ。で、その宇宙船に乗つてたのが、写真の方なの」

(やっぱりハヤタくんって宇宙人だつたんだ)

「あの、一つ訊くけど、彼は何でこの星にやつて来たの？」

「追つ手から逃げて来たつて言つてたわね」

「追っ手？」

「そう言えば、あんたその追っ手にそっくりね  
夏奈子だった。

ドンドンドン！

ドアを叩く音がした。

「誰か来たみたいね」

「地上げ屋よ」

「地上げ屋？」

「あいつら、毎日来るのよ。土地を売つてくれって  
追い返してきてあげようか？」

「え、無理よ。居る事がバレ……つて、出でつかず駄目！…  
だがもう遅い。ヒナギクは玄関に移動してドアを思いつ切り開け  
放つていた。

「五月蠅いわね。何の用よ？」

言つた所で通じる訳が無い。地上げ屋は頭に疑問符を浮かべた。  
ヒナギクは俯いて額に手を当てる。

「あんパン食べる？」

少女がヒナギクの下にあんパンを持ってきた。

「要らないわよ！それより通訳して頂戴」

「だからあんパン持つてきたのに。このあんパンはね、翻訳あんパン」と言つて、食べると言葉を翻訳してくれるの

ヒナギクはあんパンを奪い取ると、丸い口に詰め込んで「ゴクン」と飲み込んだ。

「あ、ゴメン、間違えた。それ普通のあんパンだった  
ズザー！」

ヒナギクは滑つた。

「どんだけ天然なのよあんた！？」

「ゴメンゴメン、今度は本物」

少女は言つて懐からあんパンを取り出した。

「翻訳あんパン」

## タララーン

「意味無くドラえもんやらなくて良いから」  
言つてヒナギクはあんパンを取つて口に詰め込んで、ゴクンと飲み

込んだ。

「待たせたわね」

と地上げ屋の方に向き直る。

「あんた達、今すぐ帰らないと痛い目を見る事になるわよ」

「退け、お前に用は無い！」

地上げ屋はヒナギクを横に退かして中へ入つて行つた。

「おい、お前。此処にサインしろ」

「一寸待ちなさいよ！」

「ああ？」

地上げ屋の連中は振り向いてヒナギクを睨む。

「今すぐ出て行かないと後悔する事になるわよ！」

言つてヒナギクは格好良く木刀・正宗を取り出して前に突き出した。

「お前、アホな子だろ。そんなオモチャで銃に勝てると思つての  
か？」

地上げ屋は懐から銃を取り出してヒナギクに向かた。

刹那、ヒナギクは目にも留まらぬ速度で地上げ屋の連中を一人、  
また一人と倒した。

「な、何だよ？ 今の・・・」

残りの地上げ屋がヒナギクに顔を向ける。

「残つてるのはあんた一人だけ、どうする？」

地上げ屋は逆上してパンパンッと銃をヒナギクに向かつて発砲した。  
カン！

ヒナギクが正宗で銃弾を弾く。

「この野郎！」

地上げ屋がパンパンッと銃を連射した。

ヒナギクは数発の弾丸を全て弾いた。

地上げ屋は何が起こつたのか解らなかつた。

「な、何で当たらないんだよ？」

「銃如きで私を倒せると思わない事ね」

その言葉と共に、正宗が地上げ屋の頭を叩いた。

「うつ！」

地上げ屋は呻き声を上げて氣絶した。

ヒナギクは正宗を仕舞い、グースカ軒を捶いて眠つてゐる地上げ屋共を家から追い出してドアを閉めた。

「あんた、一体何者なの？」

少女はそう訊いた。

「ただの地球人よ」

「地球人つて強いの？」

「私が強いだけよ」

「ふうん。兎に角、有り難う」

「これであいつらも懲りたでしょ」

「懲りれば良いけどね」

「え、諦め悪い奴らなの！？」

## Story 10 ハヤタヒナギ（前編）

今日はネタがてんこ盛りっす。頭を殴りまじにしないとまともに読めないかも。

## Story 10 ハヤタとナギ

此處は三千院家のお屋敷のナギの部屋。  
そこに居るのは、ナギとダブルハヤタ。

「で、見事に分離した訳だが、これは一体どう言う事なのだ？」

「俺にも解らない。そもそも、俺と此奴が一つになつてたつて事自体が不思議なんだ」

そう会話する二人の傍らで表ハヤタは一人を不思議そうに見る。

「意味が解らないが、お前は何者なんだ？」

「俺は遠い宇宙にあるセイバートロン星と叫う惑星から逃げて来た逃亡者だ」

「何、お前は宇宙人だつたのか！それで、何で逃げて来たのだ？」

「星の侵略にミスつて捕まつて牢獄にぶち込まれたから脱獄して逃げて来た。お前、夏奈子の事は覚えてるよな？あいつ、セイバートロン星から送り込まれた刺客だつたんだ。ま、今は違うがな」

「そうなのか。つーか、セイバートロン星つて聞いた事あるな。確か、ついこの前3DCGアニメで話題になつた超生命体

フ  
オーマービー ウオーズに出て来るロボット達の故郷の惑星の名

前だつたか。しかし、それが本当だとすると、夏奈子の妹はこの星に居ない事になるんじゃないのか？」

「あつ！？」

ナギの一言で真っ青になる裏ハヤタ。

（待てよ待てよ待てよ。確か、あいつと出遭つたのはG·i·l·s·es 581 C。まさか、あの惑星の住人だつてのか！？）

興奮した裏ハヤタはナギの部屋を飛び出した。

「おい、そんな慌てて何処へ行くんだ！？」

「主の家に戻る！あの人なら宇宙船持つてるだろ？からなー！」  
言つて裏ハヤタは廊下を駆け出す。

「よつ、久しぶりじゃねえか」

懐かしのホワイトタイガーが声を掛けて来た。

裏ハヤタは急停止して返答する。

「オタマ、生きてたのか

「俺はタマだ！」

「どっちでも良いじゃねえか」

「よくねえよ！つーかお前、そんな慌てて何処へ行こうてんだ？」

「昨夜ん所。じゃあな」

そう言つてまた走り出す裏ハヤタ。

屋敷を飛び出し、門を抜け、夏奈子を捜しつつ愛沢家へ向かう。

「夏奈子！」

商店街で夏奈子を発見した裏ハヤタは近付いて声を掛けた。

「朝月くん、何処行つてたのよー？」

「悪い、一寸野暮用が。それより解つたぞ！」

「何が？」

「お前の妹の居場所。G illes 581 Cだ」

「えつ・・・？」

夏奈子は一瞬、頭が真っ白になつた。

「一寸待つてよ。今私たちが居るこの星がG illes 581 Cじゃないの？」

「違う。此処は太陽系にある第三惑星地球。G illes 581 Cじゃない。そこからは20・5光年も離れてるんだ」

「嘘でしょ？」

「嘘なんか。これから宇宙へ行こうと思つ。来い」  
裏ハヤタは夏奈子を抱き抱えて愛沢家へと急いだ。

「昨夜、宇宙船あるか！？」

と昨夜の部屋に飛び込む裏ハヤタ。しかし部屋は蛻の殻だつた。  
「昨夜さんなら出掛けましたよ

」 そう言つてきたのは、メイドの春風 千桜だつた。

「何処に行つたんだ！？」

「少し散歩して来ると行つてましたが、何処に行つたまでかは・・・

。 そう言えども、丸一回経つますね

その時、裏ハヤタの脳裏に昨夜からのSOSメッセージが。

「助けて、ハヤタはーん！」

「昨夜！」

裏ハヤタは額に人差し指と中指の一本を当て、昨夜の気を探つた。  
「見付けた！」

シユイン！

その音と共に、裏ハヤタは夏奈子を抱いたままその場から消失した。

「えっ、消えた！？」

と驚いて辺りを見回すメイド、春風 千桜。  
と言つて次回は、昨夜救出＆宇宙へ旅立て！をお送り致します。

## Story 11・咲夜の救助、宇宙人∨Sハヤタ∨S伊澄（前書き）

CLANNADネタを入れました。

オリジナルの宇宙人が出ます。名前に「」注意下さい。

東京のビッグサイト付近にある海に面した倉庫。

その一角に咲夜は捕らわれていた・・・にも関わらず、犯人に対して言いたい放題言っていた。

「所で自分、ウチを捕らえて一体どないすんねん? もしかしてあれか? 身代金の要求か? ほんならウチが払つてやつても良えけどな」

この時、犯人は思つた。

（このガキ、自分がどう言う立場に立たされてるのか解つてるのだろうか? つーか、払うつて、子どもにそんな金払える訳無いだろ）

「つて、聞いとんのか自分?」

「五月蠅えよ。お前、自分がどんな立場に居るか解つてんのか?」  
言つて犯人は折り畳み式ナイフを取り出してシャキンッと展開した。

「そないな事してただで済むと思わん方が良えで」

「ふつ、助けなんか来ねえから安心しな」

「来るで。ウチが呼べばハヤタはんは絶対来る」

「そうか。じゃあ呼んで貰おう。『助けて、ハヤタはーん』ってな

「良えで。呼んだる」

そう言つと、咲夜は大きく息を吸い込んだ。そして。

「助けて、ハヤタはーん!」

マジで言つた。

「ダーツハハハハハ。誰も来ねえじゃねえか。ヒーロー漫画じゃあるめえし、呼んだら助けに来るなんて有り得ねえんだよ」

その時、夏奈子を抱えたハヤタがシューインツと音を立てて犯人の背後に現れ、咲夜の顔に悦びの笑顔が浮かんだ。

「お遊びはこれで终わりだ。今あの世へ送つてやる!」

言つて犯人はナイフを挙げ、咲夜の左胸に思いつ切り刺・・・そ

うとしたが、腕が全く動かない。

犯人は恐る恐るその動かない腕に顔を向けた。

手首を何者かに掴まれている。

犯人は顔に冷や汗を搔いた。

「おいたが過ぎるんじゃねえか？おめえさんよ！」

犯人は背後を顧みた。そこに立っているのは、夏奈子を左肩に抱えた咲夜の執事代行、朝月 隼太。

「何者だてめえ？」

「俺か？俺は、高校生兼執事代行、朝月 隼太だ！」

そう言つてハヤタは親指を軸に犯人の手首を90度右に回転させた。

ボキッ！ と何かが折れる音がして犯人の腕が90度右に折れた。

犯人は手に持つていたナイフを落として「いってええええ！」と叫んだ。

「よつ」

ハヤタは犯人の手を放し、下に落ちたナイフを蹴り上げた。

ナイフは回転しながら上昇し、咲夜の足を縛つている縄を切断した。そして咲夜の頭上を越え、後ろで手を縛つている縄を切断して地面に音を立てて落下した。

「ハヤタはん、屹度来てくれると思つとつた！」

「何寝ぼけた事言つてんだ。俺がお前を放置した事あるか？」

「あらへん。所で、夏奈子はんを抱えてんのは何でや？」

「ああ。その事なんだけど、お前宇宙船持つてねえか？」

「持つとるで」

「それは地球から20・5光年先のGilles 581 Cまでどのくらい掛かる？」

「自分、本気で言うとんの？ そないな所行かれる訳あらへんで。20・5光年言つたら光りの速さで20年と半年掛かるんやで？ 現在の科学じや其処に辿り着く前に死んでしまうで」

「何とかしろ」「無茶や」

「即答するな」

「人が痴話喧嘩をしていると、犯人が拳銃を構えた。

「おい」

「何だよ？」

とハヤタが振り向いて睨み付けた。

「拳銃つてお前、舐めどんのか？」

「舐めてんのはお前の方だ。幾ら強いからってな、拳銃相手には敵わねえんだよ」

「そりゃ。じゃあ撃つてみろよ」

言つてハヤタは拳を作つて中指を立てて相手を挑発した。神経を逆撫でされた相手は躊躇無く拳銃を発砲した。

カーン！

妖刀カマイタチを手にしたハヤタが既の所で弾丸を弾いた。

「クソーッ！」

パンッパンッパンッパンッパンッ！　　と弾丸が連射される。

ハヤタは迫り来る弾丸を全て、カマイタチで弾き飛ばした。

「畜生！」

殺人犯が力チカチと引き金を引いた。だが、弾倉が空になつており、弾丸は発射されなかつた。

「へつ、次はこっちの番だな」

そう言つてハヤタはカマイタチを投げ捨てて相手の懷に駆けた。

「ふんつ」

相手を空中に蹴り上げて連続キックを1・000発お見舞いし、地面を蹴つて空中に飛び上がり、前方宙返りをして相手を右足で地面に叩き付けた。

「ゴフツッ！」

そしてバウンドして上がつてきた相手を今度は左足で叩き付ける。相手の体が地面に強打され、地面が凹んだ。

ハヤタは綺麗に着地して相手に近付く。

「病院行くか？」

「殺・・・せ・・・・」

「あ、そ」

ハヤタは相手を思いつ切り蹴り飛ばした。

殺人及び誘拐殺人未遂犯は勢い良く吹っ飛んで行き、宇宙空間に飛び出して直線上に偶々在った宇宙船に激突した。

その際、宇宙船に穴があき、宇宙船が地球の引力に引っ張られて落下を開始した。そしてハヤタ達の居る倉庫へと墜落してしまった。

「・・・・・」

言葉を失うハヤタ達三人。

「宇宙・・・船？」

咲夜が首を傾げると、宇宙船らしき物体の「コツクピットらしき場所から明らかに人間では無い何かが出て来た。

そいつの容姿は、腹部に太と書かれた服を着たデブ・・・としか言い様が無かつた。

そのデブがそいつの星の言葉でこう言った。

「おいだの宇宙船に穴をあけたのはお前でプか？」

ハヤタはそいつの言葉を理解し、同じ星の言葉で答えてやる。「スマン。お前の宇宙船があるとは思わなかつたんだ。許してくれ「許さんでプ！」

怒ったデブは手を前に出して変な光線を発射した。

「これでお前をおいだの手下にしてやるでプ！」

「当たるかよ」

言つてひらりと身をかわすハヤタだったが、それが失敗であつた事に後悔した。

その失敗の所為で咲夜に妙な光線が当たつてしまつたからだ。

「えつ！？」

光線を浴びた咲夜は、ボンッと一気に太つてしまつた。ハヤタは光線を放つたデブに向かつて訊ねる。

「貴様、メタボリック星人だな！？」

「その通りでプ。お前を手下にする事には失敗したが、代わりにお

前の後ろに居たその女を手下に出来たでプ」

言つてデブ咲夜を指差す「デブ。

「何！？」

ハヤタはデブ咲夜を見た。

「手下一号！この男を殺つてしまふで！」

「デブがデブ咲夜に命令すると、デブ咲夜は「はい、デブプリオ様」と返事をしてハヤタに飛び付いた。

「逃げろ、夏奈子！」

ハヤタは夏奈子を何も無い所へ投げ飛ばした。

「キヤツ！」

夏奈子は地面を転がる。

「うわっ！」

ハヤタはデブ咲夜にのし掛かられ、下敷きになつて身動きが取れなくなつた。

「くっ・・・重い・・・」

ハヤタはあまりの重さに耐えきれず、氣を失いそうになつた。

「頼むから退いてくれ咲夜」

だが咲夜を耳を貸さなかつた。

「無駄でアよ。そいつもうおいだの言つ事以外聞かないでア」

「どうか。なら問あう。お前の言つ事しか聞かないつて事は、お前自身に従うのかお前の声に従うのか、どっちだ？」

「それは当然おいだ自身でアよ」

「だよなあ。じゃなきやお前の声使つて動かせるもんなあ」

ハヤタはそう言つて苦笑した。

「言いたい事はそれだけでアか？」

「竜の手！」

ハヤタは右手を竜の手に変化させて「デブプリオの方に伸ばした。鋭く尖つた竜の爪がデブプリオを襲う。

「うわっ！」

デブプリオは間一髪避けたが、爪の先が僅かに鼻を掠めた。

「何するでアか！？汚いでアよ！？」

「お前なんか右手で・・・つ！？」

その時、ハヤタの竜の手に向かつて何処からともなく御札が飛来してきて張り付いた。

ハヤタはその御札が張り付いた手を見て顔を真つ青にした。

（ど・・・何処に居るんだ・・・？）

と辺りを見回すハヤタ。

彼が捜しているのは、天敵の鷲ノ宮 わしのみや 伊澄である。

「八葉六式、撃破滅却」

ドーン！

ハヤタの竜の手ドラゴンハンドが大爆発を起こし、縮んで元に戻ってしまった。激痛に悶えるハヤタ。

「誰だか知らないが助かつたでブ」

デブプリオは御札が飛んできた方を向いて言った。

彼が向いた先には、物凄い形相でハヤタを睨む伊澄が居た。

「妖怪さん、貴方の相手はこの私がします」

「妖怪じやねえ！」

「妖怪で無いのならその禍々しい妖氣は何ですか？」

と伊澄が指差したのは、紫色の禍々しいオーラを放つハヤタの右手。

「そんな事今はどうでも良いだろ！？この状況を見て判らなければお前は相当のお馬鹿さんだ！兎に角お前、このデブ男を何とかしろ！」

「妖怪さんにバカにされてしまいました。行きます。八葉六式、撃破滅却」

と伊澄が御札を投げてハヤタの右手を攻撃した。

「ぐおわ！」

激痛に悲鳴を上げるハヤタ。

「てめえ、攻撃する相手が違うだろ！」

「私、何か間違った事しましたでしょうか？」

「泣くぞ俺」

「勝手に泣いて下さい」

その言葉にショックを受けたハヤタは引き攣り笑いで泣いた。

「自分、泣くか笑うかどっちかにせい！」

とデブ咲夜がハリセンを出してハヤタの顔を思いつ切り叩いた。操られても突つ込みの勢いは変わらない咲夜であった

と天の声。

「・・・・・」

ハヤタは無言で顔を顰めた。

「何や自分？怒ったか？」

「なあ、咲夜。思い出してくれないか？俺の事」

「だから無駄だと言つてるのが解らないで普か？」

「俺は分からず屋だからてめえの言つてる事は何も理解出来ねえ」

「バカにしてるで普か？」

「それ意外に何が有る。このデブ野郎が」

「むむむつ、許さんで普！手下一号、首を絞めるで普！」

デブプリオがそう命令した瞬間、伊澄がデブプリオに御札を投げて張り付けた。

「その妖怪さんは私の獲物です。余計な真似はしないで下さい」

「何で普かあんたは！？」

「八葉六式、撃破滅却！」

ドーン！

大爆発を起こしたデブプリオが真っ黒焦げになつて倒れ、頭にお星様を浮かべて気絶した。

同時にボンッ！とデブ咲夜が元の咲夜に戻つた。

「あれ、ウチどないしてたんや？」

言つて咲夜は頭に疑問符を浮かべた。

「あら、咲夜じゃない」

と近付いてくる伊澄。

その伊澄がハヤタの顔の上に乗つた。

「伊澄のパンツ可愛いな」

ハヤタがそう言つた瞬間、赤面した伊澄が「キヤーー」と悲鳴を上げて下にある彼の顔を思いつ切り踏み付けた。

「げぼふつ！」

ハヤタは氣絶してしまつた。

「伊澄、ウチの臨時執事に怪我させんといてくれるか？」

「え？ この妖怪さん、咲夜の執事なの？」

「否、妖怪じやあらへんから」

「でもおぞましい妖氣をビンビンに感じるわ」

「ああ。それは妖氣やのうて執事オーラやな」

咲夜は素でボケてみたが、誰も突つ込まない。

「・・・つて、誰か突つ込む奴はおらんか！？」

「つーかてめえらいい加減退けよ！」

と目を覚ましたハヤタが突つ込んだ。

「お、ハヤタはん起きたんか」

「起きたんか、じゃねえよ！」

「ああ、スマン」

咲夜はハヤタの上から退いた。

「伊澄も早う退いてやらんか？」

「そうしたいのは山々なんだけど、妖怪さんのおぞましい妖氣に当てられて動けないの」

「だから妖怪じやねえよ！」

「何か二人とも仲良えな。嫉妬してしまいそうやで」

「変な事言わないで咲夜。仲良くなんて無いわ」

「だあつ、もう！」

ハヤタが強引に起き上がると、伊澄は地面に転がつた。

「てめえも何時までも寝てんな！」

ハヤタが黒焦げになつて倒れている「アブプリオを蹴つて起こした。

「痛かつたでプレー」

「おい、てめえ」

「な、何でプレー？」

デブプリオはハヤタの方を向いて体を震わせた。

「お前の宇宙船直してやるからG·i·l·s·e·s 581 Cまで乗せてけ」

「いやふー」

ガスン！

ハヤタはデブプリオの顔面を殴った。

「痛いでプ！ 許さないでプよ！」

怒ったデブプリオが妙な光線を放つた。

ハヤタは妖力のバリアを張つてそれを打ち消した。

「てめえのメタボリック光線は俺には効かねえよ」

「クソ、もう一度でプ！」

ハヤタ曰くメタボリック光線を再度放つデブプリオ。だが、またもやバリアを張られて打ち消される。

「アホか。勉強しろつつーの」

ハヤタはガツンッとデブプリオの頭を叩いた。

「痛いでプよ！」

「殴られたくなかったら0.1秒以内にG·i·l·s·e·s 581 Cまで乗せて行くと約束しろ」

「乗せ・・・つ！？」

「どぐしつ！」

デブプリオの顔面にハヤタの蹴りが埋ずまつた。

「言えないでプよ！」

「挑戦してただろ。言えないなら蹴る前に言え」

「て言うか、殴られたくなかったらつて言つたでプ。お前、明らかに蹴つたでプ」

「突つ込むな！」

ガスン！

ハヤタの拳がデブプリオの顔面に埋ずまつた。

「酷いでプ。手下一号、殺るでプ！」

「しーん、と静まる場。

「どうしたでフカ！？殺るでフよー！」

「お前、誰に言つてんだ？手下一号なんて居ないぞ」

「そこに居るじゃ ないでフカ」

デブプリオは咲夜を指差した。

「つて、あれ？ 戻つてるでフ」

「お前が気絶したからな。それより乗せて行くか否か決める。それ

によりお前の生死が決まる」

「乗せるなんて嫌でフ！だからと言つて死ぬのも嫌でフー！」

ハヤタはやれやれと肩を竦めた。

## Story 11・咲夜の救助、宇宙人∨Sハヤタ∨S伊澄（後書き）

劇中でデブ咲夜が言った「デブプリオ」のフルネームはレオナルド・デブプリオです。

三千院家の敷地にある広い空港。

そこに在る飛行機の点検施設で、デブプリオの宇宙船が修理されていた。

「で、何なんだこれは？」

そう訊ねたのはナギだった。

「あそこに居るメタボリック星人の宇宙船だ」

裏ハヤタはそう言つて隅で椅子に座つているデブプリオを指差した。

ナギが「ふーん」とデブプリオを見る。

「おい、お前」

ナギがデブプリオに近付いて声を掛けた。

デブプリオは疑問の表情でナギを見る。

「私は三千院 ナギだ。お前の名を教えてくれないか?」

「???

言葉が通じなかつた。

「おい、聴いてるのかデブ?」

「あ、そいつ宇宙人だから地球の言葉が通じないんだ」と裏ハヤタがやつてきて言つた。

「お前、通訳出来るのか?」

「出来る」

「じゃあ頼む」

「嫌だ」

「何!?

「お前の様な生意気な餓鬼の言つことは聞けないなナギが裏ハヤタを睨んだ。

「何だ、やるか?」

裏ハヤタがナギを睨み返した。

バチバチと火花が散る。

「あの、二人とも。喧嘩はやめようよ」  
そこに割り込んだのは、表ハヤタだった。

「お前、居たのか」

と裏ハヤタ。

「ずっと居たよ」

「影薄いな、お前」

とナギ。

「ひ、酷いよ三千院さん」

言つて表ハヤタは泣き出した。

「泣くな！」

裏ハヤタが表ハヤタの頭をグーで殴る。

その直後、宇宙船の修理が終わつて声が掛かつた。

「皆さーん、宇宙船の修理が終わりました！」

裏ハヤタは作業員の方を向いて「ご苦労」と一言口にした後、デブプリオの方を向いた。

「よし、デブプリオ。約束通り俺たちを乗せていけ」  
デブプリオはムカつく顔で「いやふー」と言つた。

「そうか、死にたいか。なら殺してやろう」

言つて裏ハヤタは光弾を手の平に作つてデブプリオに向けた。

「や、やめるでブ！ 連れていくでブ！」

扱い易い奴だった。

「よし、お前ら。乗り込め」

裏ハヤタがそう言つと、ナギ、マリア、ハヤテ、タマ、咲夜、伊澄、表ハヤタ、夏奈子が宇宙船に乗り込んだ。

「おい、デブ。お前が乗らなきゃ動かせないだろ」

「デブ言うなでブ！」

怒つたデブプリオが変な光線を放つた。

裏ハヤタは「あらよつ」と避ける。

「貴様の技は食らわねえ。残念だつたな」

「くっ・・・」

「つーか早く乗れ」

裏ハヤタはデブプリオを宇宙船に放り込み、乗り込んだ。

そして宇宙船は滑走路に出て宇宙へ飛び立つた。

「デブ、G il e s e 581 ここまでどのくらい掛かる?」

「そんなの教えてないでプ」

「あ、そ。じゃあお前の心を読むとしょ」

裏ハヤタはデブプリオの頭に手を置いた。

「成る程。20年と半年か。遅い!もつと早く着かないのか!?」

「ワープを使えば一瞬で行けるでプが、お前の為にワープなど使いたくないでプ」

ポチッ

裏ハヤタは側に在った赤いボタンを押した。

するとワープが起きていつの間にかG il e s e 581 の

目の前に来ていた。

「なつ、勝手に押すなでプ!」

「ああ?」

裏ハヤタはデブプリオを睨んだ。

「ひいいつ!」

裏ハヤタの恐ろしい顔を見たデブプリオの顔が真っ青になつた。

「着陸しな」

「無理でプ。今ワープで燃料が空になつたでプ」

言つてデブプリオは燃料の残量計を指差した。

そこには0%と表示されていた。

「これからこの宇宙船は墜落するでプ」

「何!?」

その途端、宇宙船がガコンッと揺れて落下を開始。G il e s e

581 Cへと墜落した。

ドカーン!

墜落した宇宙船は轟音と共に巨大なクレーターを作り上げた。

その衝撃で、宇宙船に乗っていた者は全員、船外へ飛び出した。  
ズボツ！

裏ハヤタが墜落現場からかなり離れた場所の地面に埋まつた。

ポンツ！

地面から抜け出した裏ハヤタは宇宙船の方を見た。

その先には米粒並の宇宙船が在る。

「随分と飛ばされたな。何処だ此処？」

裏ハヤタは辺りを見回した。

すると警報が鳴り、ライフル銃を持つた兵隊達が続々とやつて來た。

「侵入者だ、撃て！」

どうやら此処は軍隊の基地のど真ん中らしい。

（やつべえな）

裏ハヤタは両手を上に挙げた。

「何者だ貴様！？」

兵隊の一人が裏ハヤタに詰め寄つて訊ねる。

「セイバートロン星と聞いて何か判らないか？」

「なつ、貴様、セイバートロン星を征服しようとしたならず者か！」

「この星にも貴様の情報は届いているぞ！」

「だからどうした？」

「生きたままセイバートロンに送り付けてやるつ」

「やれやれ。お前たちは俺を舐めているようだな」

「何だと？」

シユイン！　その音と共に、裏ハヤタの姿が消え、瞬く間に全ての兵隊達は倒されて行つた。

残つたのは裏ハヤタに詰め寄つた一人の兵隊のみ。

「ば、化け物だ！」

兵隊はそう叫んで逃げようとしたが、裏ハヤタに頸を掴まれてしまつた。

「逃げないよな？」

兵隊は顔を引き攣らせて「逃げません」と宣言した。

「ようし。早速だがお前に問おう。此奴に似た奴を見てないか?」

そう言つて裏ハヤタは夏奈子の写真を見せ付けた。

「この方なら、うちの施設で働いてますよ」

「そうか。それにしてもこの星は良いな。空気も澄んでるし、屹度異星人に高値で売れるだろうな」

「ま、まさか、この星を制圧する気ですか?」

「しねえよ。つーか、それ本当なんだな?」

「な、何がですか?」

「この写真の奴に似た人物だ」

「え、ええ。ですから、うちの施設で働いていると」

「案内・・・つ!?

その時、裏ハヤタの内なる竜<sup>ドラゴン</sup>が共鳴をした。

（居るのか、あいつが！？）

「あの、どうかしたんですか?」

「悪い、この話しさ無しだ!」

裏ハヤタはそう言つと宇宙船の方へ飛び去つていった。

裏ハヤタ、間接的にヒナギクと再会しました。

## Story 12・ヒナ、ハヤタに再会する

宇宙船の回りには、伊澄を除いた乗組員全員が集まっていた。

「おい、あの靈媒師は何処だ？」

裏ハヤタはそうハヤタに訊ねた。

「さあ。屹度、また迷子になつてるんでしょう」とハヤタが答える。

「どうか。なら問題無い」

「どう言う意味ですか、それ？」

「俺はあいつが嫌いなんだ。だから居ないと清々する裏ハヤタがそう言うと、伊澄がひよっこり姿を現した。「あのー、私が居ないとどうして清々するのでしょうか？」

「うあつ、お前何処に居たんだ！？」

「ウチが見付けて来たんや。感謝せい」と咲夜が裏ハヤタに言つ。

「見付けてくるなよ！？」

「何でや？」

「嫌いだからだ」

「何でや？」

「俺を妖怪と見なして攻撃して来るからな」

「なあ伊澄、あんまウチのハヤタはん虜めんといてくれへんか？」

「別に虜めてません。私はただ、六式使いの使命を遂行して<sup>すいこう</sup>るだけです」

「使命ねえ・・・」

とその時、施設の方からドカーンっと爆発音が聞こえた。振り向くと、施設が黒煙を出して炎上していた。

裏ハヤタはその施設に向かつて飛んでいった。

その後を、デブプリオを除いた全員が後を追つた。

「今之内に逃げるデブよ。この隠していた燃料で」

デブプリオはそう言うと、宇宙船の燃料タンクに燃料を流し込んで宇宙船に乗り込み、宇宙へ飛び立つた。

炎上中の施設。

そこでは沢山の衛兵たちが、巨大な緑の竜・グリーウィアを相手にライフルを撃ち込んでいた。

「うわああああ！」  
グリーウアは大きく口を開け、衛兵たちに火の玉を吐く。

「わあわあああ！」

衛兵たちは炎に包まれ数か激突する。

「物語は物語だ！」

ブリーフトは誰かを土下、セントラルドア逃げ惑ひの間、

卷之三

八葉六式

（月刊）指揮者 徒然の音楽 指揮者研究会

ドーンツー！

御札が爆発し、グリーヴァの尻尾攻撃を防ぐ。

「皆さーん、大丈夫ですかー？」

しかし衛兵たちは何を言つてゐるのか解らず、首を傾げた。

「グワ！？」

グリーグアは伊澄を見ると驚き飛び退いた。

「罪も無い人々を傷付けるなんて許せません。妖怪さん、覚悟！」  
言って伊澄は御札をグリーヴァに投げた。

「八葉六式、擊破滅却！」

その掛け声と共に、仮面を着けた謎の人物が現れて御札の行く手

を阻む。

ドローン！

御札は謎の人物に当たつて大爆発を起こした。

「うわっ！」

謎の人物は吹つ飛び、背中をグリーヴァにぶつけて落下した。グリーヴァは落下していく謎の人物の下に手を入れてキャッチした。

謎の人物は立ち上がり、グリーヴァを見ながら言う。

「何が遭つたかは知らんが、取り敢えず元に戻れ」

すると、グリーヴァの体が小さくなつていき、ヒナギクの姿になつた。

（やつぱりな）

と謎の人物は頭を抱える。

「あなた、ハヤタくんなの？」

ヒナギクは謎の人物に近付きそう訊ねる。

しかし謎の人物は首を横に振るつてこう答えた。

「違う。私はMorning moonだ」

・・・・・

沈黙が暫し場を支配した後、ヒナギクがそれを破る。

「直訳じゃない！て言うか顔ぐらい見せなさいよ！？」

そう怒鳴つたヒナギクが謎の人物の仮面に手を伸ばした。しかし、謎の人物は抵抗する。

「ヒナギクさん？」

とそこに現れたのは表ハヤタだった。

「え？」

ヒナギクは表ハヤタを見て固まる。

「すみません！人違いでした！」

ヒナギクは謎の人物に頭を下げるが、表ハヤタの下に駆けてた。

「ハヤタくん！」

と表ハヤタに抱き付く。

「 ちよつ、恥ずかしいって」

表ハヤタは頬を赤らめながら言った。

裏ハヤタは一人を見ながら「ふう」と安堵の溜め息を吐いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6771c/>

---

ハヤテのごとく！～愛沢咲夜と愉快な仲間たち～

2010年10月9日03時55分発行